慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2023年　医学部新年祝賀式開催

教職員全員で支え合う精神で国内外にむかって邁進

医学部では、毎年新春を迎えて、教職員および三四会員による新年祝賀式を開催しています。今年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、1月5日（木）に、関係者のみ、マスクを常時着用するなどの感染防止対策を徹底して開催されました。式典の様子は、慶應義塾大学病院2号館11階の大会議室よりZOOMウェビナーにて生配信いたしました。

慶應義塾大学と親交の深い学校法人北里研究所から、小林弘祐理事長を来賓として迎え、冒頭に金井隆典医学部長が年頭の詞を述べ、伊藤公平塾長（欠席のため北川雄光常任理事が代読）、小林弘祐北里研究所理事長、武田純三三四会会長、松本守雄病院長、末松誠医学部教授（教職員代表）からそれぞれ賀詞が述べられました。

また、めまぐるしい1年であった2022年、医学部・病院のために一丸となって診療、研究、教育に従事した教職員に対して感謝の気持ちが伝えられました。2023年もウィズコロナの状況が続きますが、いまや慶應義塾の組織文化となった、教職員全員でお互いを支えあうという精神で、国内外にむかって邁進していくことが述べられました。

新年祝賀式と併せて「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく慶應医学賞授賞式が行われ、眼科学教室の准教授栗原俊英君と感染症学教室の専任講師 南宮湖君の2名が受賞されました。

撮影：岸　剛史

慶應医学賞 ライジング・スター賞受賞者（左から）金井隆典医学部長、南宮湖君、北川雄光常任理事、栗原俊英君、久保田義顕医学研究奨励事業委員長

武田純三三四会長によるご挨拶

式典の様子はウェビナーで配信された

第18回　白衣式

スタートラインに立った104回生の門出を祝う

去る1月7日、令和4年度白衣式が挙行された。白衣式は、臨床実習を開始する医学生が、その節目として白衣に袖を通し、医師を目指す者としての心構えを再認識する式典である。米国コロンビア大学で始まり、本塾では2006年から執り行われてきた。今年は北里講堂に104回生110名が一堂に会し、学生有志による演奏で式典が始まった。

式典には金井隆典医学部長、松本守雄病院長、武田純三三四会会長らが列席し、臨床実習に進む104回生に、医療者としての心得と餞の言葉を贈られた。

金井医学部長は世界を見据えて活躍することの重要性と期待を、松本病院長は白衣を着用し患者さんの声を聴くことの重みを、そして武田三四会会長は慶應医学が紡いできた歴史と三四会の縦横の繋がりについてお話しされた。なお、三四会からは記念品として印鑑付きボールペンが贈呈された。

その後、今までお世話になった先生方からのメッセージビデオ（104回生制作）が放映され、個性に溢れたエールの言葉に会場はあたたかな雰囲気で満たされた。

今年は感染拡大防止の観点より、先生方から学生一人ひとりへの白衣授与は行われず、合図とともに各々が白衣を一斉に着用した。その後学生代表3名が「誓いの言葉」を斉唱した。閉会の辞として、門川俊明医学教育統括センター長がコロナ禍での臨床実習に伴う責任と感謝について述べられた。

104回生白衣式委員長の小林博也君は、「誓いの言葉」に込めた思いについて「白衣式という医学部生活での節目で、支えてくれる周りの人に感謝の気持ちを伝えることに加え、104回生らしさをいかに表すかということを委員で議論した。104回生は多様性溢れる集団でありながら、全員が目指すべき先生は人類社会への貢献、そして困難な課題への挑戦であって欲しい」と語った。

白衣に袖を通した瞬間に心に吹き抜けた真新しい気持ちは、これまで支えてくださった方々への感謝と、これから医療者として出会うことになるすべての人への決意である。長い道のりのスタートラインに立ったこの日抱いた思いを忘れることなく、医療者として、人として、着実に成長し進化を続けていきたい。

（4年　角田　安優）

白衣式に臨んだ104回生たち

自ら白衣に袖を通した

「誓いの言葉」を読み上げる

104回生　誓いの言葉

私たち１０４回生は、
感謝の気持ちを胸に、
信頼される医師となること、
多様性を生かし、人と社会に貢献すること、
そして全社会の先導者として、
新しい医学の形を追究し、
常に挑戦し続けることを、
ここに誓います。

慶應義塾大学医学部発ベンチャー協議会

第4回　ベンチャーサミット開催報告

2023年1月25日に慶應義塾大学信濃町キャンパスにて、慶應義塾大学医学部発ベンチャー協議会第4回ベンチャーサミットが北里講堂で開催された。

慶應義塾大学医学部発ベンチャー協議会は今年で設立5年目を迎える慶應義塾大学医学部発ベンチャー18社からなる任意団体（代表：坪田一男眼59回）であり、ベンチャーサミットはその全社のピッチが一度に聞ける大変お得な毎年恒例イベントである。

本年は特別講演として、サスメド株式会社の上野太郎社長より「デジタル技術による持続可能な医療」について、臨床研究推進センターの許斐健二教授（眼73回）より「Academic Research Organization（ARO）の役割～慶應義塾大学病院臨床研究推進センターに求められるものは～」講演をいただいた。

ピッチセッションではベンチャー各社から非常に熱のこもったプレゼンテーションが行われ、株式会社坪田ラボの東京証券取引所グロース市場上場を筆頭に各社から一年間の大きな進捗が聞かれ、18社の時価総額・累計研究助成金獲得額・株式資金調達額はそれぞれ合計471億円・34億円・134億円超となり、学生団体のk-mic（代表：中原楊　104回）の司会・ピッチも相まって会場は大いに盛り上がった。

本年は二年ぶりのオンサイト開催にも関わらず、ベンチャーキャピタル・製薬企業・金融機関・アカデミア・学生など100名を超える来場者を得て、注目の高さを感じるとともに、イベント後の交流も含め、本塾の技術の実用化・イノベーション推進の観点から非常に有意義なものであった。

また、これに合わせてベンチャー協議会からはアニュアルレポート（編集長：循環器内科発ベンチャーHeartseed㈱取締役CFO高野六月）が発刊されており、ぜひご覧いただきたい（QRコード参照）。

最後に、日頃よりご支援ご支援されている各教室には感謝申し上げるとともに、引き続き、実学の精神をもって、躬行実践し、全社会の先導者たるべくイノベーション推進のご支援を賜れば幸いである。

ベンチャー協議会では起業志望者・新規会員、そしてエコシステムを支える協賛企業を募集している。

（堅田侑作　眼89回）

アニュアルレポート

当日の会員集合写真

第５回　三四会理事会報告

1．塾のウクライナ避難留学生支援に寄付。
2．医看薬の３学部学生による、一貫校高校生への説明会“KAA-Jr.”を３月19日に予定。
3．会則検討委員会報告：施行細則の役員候補者推薦では「原則として次期評議員中より選び」と記載されており、役員候補者を次期評議員に限定するのか、あるいは「原則」とあるので広く会員にも機会を与えるべきかが議論されてきた。評議員ではないが、三四会内で重要な役割を担っている理事もおられることから、施行細則第18条「選考とは別に会員より理事を委嘱できる」のいわゆる会長枠を、任用理由を明記した上で非評議員から登用することにして、役員候補者推薦時には現役員が評議員であるか否かを明記することになり、会則は現状のままとすることになった。また、クラス評議員に三四会の活動の理解を深める必要があるとの意見があり、各クラスでの活動内容に関する調査を行うこととした。

オンライン会議開催の有効性に関する会則変更については、継続審議とした。

4．会員情報管理システム：詳細な詰めの検討が行われていて、３月の移行をめどに進められている。会費支払いは、基本はクレジットカード決済として、ゆうちょ銀行による振込取扱票を残すことになった。寄付口座を設けて、三四会への寄付も募ることとした。

また、ホームページによる広報に重きを置く必要があることから、委員会の定期開催、委員の充実等を検討することにした。

三四会奨励賞の推薦について

Young Investigator Award, Keio University School of Medicine Alumni Association（Sanshikai）

目的　若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．次の各分野で学位取得後地道に研究を続け、すぐれた業績をあげた三四会正会員で三四会員として少なくとも１年は経過している者（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
対象となる分野
イ、臨床医学　　ロ、基礎医学
2．満40歳以下

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
3．締切は2023年４月14日（金）必着、三四会事務局宛とします。
4．提出書類は、推薦状、被推薦者略歴、業績目録、主論文一編の別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、提出部数は、オリジナル1部とコピー10セットが必要です。
5．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書（オリジナル１部とコピー10部）が必要となります。

※推薦状、略歴、業績目録、論文、共著者の承諾書を順に組んで１部とし、コピーも同じ体裁に整えてください。
※推薦状のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：http://www.sanshikai.jp/award/shourei/index.html

選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約８名程度の受賞者を決定します。受賞者は2023年６月17日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域で業績をあげている三四会員も含む）
2．年齢は問わない。

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
3．締め切りは、2023年４月14日（金）必着、三四会事務局宛とします。
4．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、オリジナル１部とコピー10セットが必要です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：http://www.sanshikai.jp/award/kourousyo/index.html

なお、社会功労賞は、年を重ね、業績を積むことにより、より事業に重みを増すものです。これまでに採択されなかった事業についても是非再度応募ください。

選考ならびに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則１名の受賞者を決定します。受賞者は2023年６月17日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

第28回
慶應医学賞
候補者推薦募集
推薦締切日：2023年3月5日(日)

山村　耕花
『腑分』
慶應義塾所蔵

過去の受賞者　＊臨床年

1996	Stanley B. Prusiner, 中西重忠	2005	藤吉好則	2014	Karl Deisseroth, 濱田博司
1997	Robert A. Weinberg, 谷口維紹	2006	Thomas A. Steitz	2015	Jeffrey I. Gordon, 大隅良典
1998	M. Judah Folkman, 御子柴克彦	2007*	Brian J. Druker, 溝屋裕明	2016	Svante Pääbo, 本庶 佑
1999	Elizabeth H. Blackburn, 吉川信也	2008	Fred H. Gage, 坂口志文	2017*	John E. Dick, 小川誠二
2000	Arnold J. Levine, 中村祐輔	2009	Jeffrey M. Friedman, 寒川賢治	2018	Feng Zhang, 柳沢正史
2001	Tony Hunter, 竹市雅俊	2010	Jules A. Hoffmann, 審良静男	2019	Hans C. Clevers, 岸本忠三
2002*	Barry J. Marshall, 田中紘一	2011	Philip A. Beachy, 田中啓二	2020	Aviv Regev, 宮脇敦史
2003	Ronald M. Evans, 宮下保司	2012*	Steven A. Rosenberg, 関野博行	2021	Katalin Karikó, 濱木理
2004	Roger Y. Tsien	2013	Victor R. Ambros, 長田重一	2022*	Carl H. June, 河岡義裕

〈審査基準〉　生命科学の研究に新展開をもたらした業績
基礎医学・臨床医学の発展に対する多大な貢献
〈推薦方法〉　慶應医学賞ホームページ（下記URL）より推薦フォームへお進み下さい
https://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/
〈副　　賞〉　2名（国内1名、国外1名）に対し、副賞として各1000万円とメダルを授与

慶應義塾医学振興基金
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地
TEL：03-5363-3609　E-mail：k-nomination@adst.keio.ac.jp
https://www.ms-fund.keio.ac.jp

鑑知来

COVID-19が報告されてからすでに3年が経つが、今回のパンデミックによって人生はいつ、何が起こるかわからないことを思い知らされた。昨日まで普通だったことが、明日も同じ「普通」であるのか、あるいは全く予期していない現実が待っているのか。Risk EngineerのNassim Nicholas Taleb氏はこうした現象を「ブラック・スワン」と呼んでいる。白鳥はすべて白色と信じられていたところ、オーストラリアで「黒スワン」が発見されたことにより人々の常識が覆された。

COVID-19も、東日本大震災も、我々にとってはブラック・スワンであった。喉元過ぎれば熱さを忘れるが、人間はこうしたランダムな現象に振り回され、時として犠牲になってきた。しかし、ランダムであることは、決して悪いことばかりではない。Taleb氏はこれをantifragileと表現しており、antifragilityは強くなるためには必要な要素であると論じている。ただし、トータルでantifragileになるためには、パーツが犠牲になるのは避けられない。抗加齢医学にはホルミーシスという、酸化ストレスによって一部の細胞が死ぬことにより、ストレスへの耐性が強くなるという仮説がある。運動によって筋肉組織を定期的に「破壊」しながら強くなるのも一つの例である。

COVID-19のようなパンデミックは、人類のantifragilityを高くするかもしれない。しかし、医療従事者は一人一人の患者が犠牲にならないように努めなければならない。この矛盾した状況を全員で生き抜くには人類の英知が必要だ！そう考えた私は、昨年末にCOVID-19ワクチンの4回目接種に臨んだ。副反応では死なない。そして、接種によって自分も、人類も強くなると信じたい。

（藤田医科大学東京先端医療研究センター　榛村重人　68回）